

収入と生活にみる土木技術者像

二つの時代の語るもの

① 私たちの歩いてきた道

久保田 豊*

私は大正3年に東大土木を出てから、土木または土木をもととする職席または事業に従事している。今年（昭和51年、1976年）で62年になる。年は満86才、まだ働きたいし、働けると思う。

1. 内務省工費雇となる

私は卒業後内務省に採用され、工費雇（工事費予算のうちから支払われる雇である）として内務省東京土木出張所勤務となり、1か月あまり東京本所の技師席の大部屋にいて、先輩の話を聞き、同期で就職した鈴木雅次君らと行動をともした。毎日昼飯は技師の食堂で末席に列し、神田の洋食屋から仕出すスープほか一皿のおきまりを食べた。ときどき所長の中原さんの友人や、内務省

* 名誉会員 日本工営（株）会長

出身の古い人などが見え、面白い話や、経験談などをうけたまわり、実に有益な1か月の訓練期間であった。

東京土木出張所というのは、大手町にあって、機能も場所も今の地建にあたると思う。所長の中原貞三郎さんは明治15年の東大前身の学校出で理学士であり、土木科卒業の土木屋であり、一度球面三角を使う測地学の講義を聞いたことがある。数年後に古い人たちと一緒に工学博士に推薦された。中原さんの話によると学校出たては月給50円であって、それで自家用の人力車を持ち、車で役所に通ったとのことである。さしあたり、学校出たてで今でいうなら自家用自動車を運転手つきで持ったことになるであろう。その話によると、その後月給は少しずつあがっているが、生活はちっとも変わらぬ、当時は月給400～500円になっておられたと思う。

名井さんという人が工務部長で面白い話をする人だった。後に北海道庁勤務の勅任技師になられ、私の弟が法科を出て内務省に勤め、北海道の道路課長に若造の身で赴任したので、よろしく引き回しをお願いしたことがある。明治26年卒の比田さん、27年の安達さんほか大勢おられ、いずれも河川改修事務所の主任技師を勤め、これらの人たちと一緒に、私どもも現場に出てからも毎月21日東京本所に出て昼食会に列なり、現場のこと、仕事のこと、その他種々の話をうかがったものである。そのころまだ現場を持っておられなかった明治36年東大出の青山士さんという人がいて——この人はあとで内務

技監になられた——面白い経歴を持っておられ、われわれ新卒生はこの人にたかってお茶をご馳走になり、またお宅に押しかけたものである。青山さんは学校を卒業すると、広井教授——偉い先生で、私らは橋梁を習ったが港もやり河川もやる人で、アメリカ合衆国で勤めておられたこともあり、合衆国で橋の本を書いてよく売っていたそうである——をお願いして、そのころ話題になったばかりのパナマ運河で働きたいと紹介状をもらい、まだ何も無いひどく不衛生なパナマで測量からはじめ、約10年近く働いて、防衛工事が始まって外国人はいづらくなって帰ってきたという人で、その勇氣といい、経験といい得難いお話であった。私も後年この国を回ってコンサルタントの売込みをやったことがある。9月になって、われわれはそれぞれの現場に配属され、私は渡良瀬川改修勤務となり、安達主任技師の下で、村技師の直接指導を受けて、私は特殊工事、水門や橋梁など付帯設備を受け持たされた。月給は本給50円で、ほかに月額旅費を8円もらった。翌年暮から毎年10円ずつ昇給したと覚えている。私の1年先輩で高等学校も同じ五高で前から知っていた坂田昌亮君というのがいて、万事世話をしてくれ、宿は村沢旅館という宿屋で、普通一泊60銭のところそのまま1か月18円で、寝具や手持品を持ち込んで住み込んだ。毎日ふつうの客と同じ刺身など同じものばかり食わすので弱った。当時、技師には専用の自転車を持たされ、われわれ新米学士も技師扱いとして配給されていたので、これを使って広い事業地域を調査のため回ったり、また、受持の工区に通ったりしたものであった。工事は直営工事で、人夫を集めて仕事をやるのであった。私の担当の水門工事の設計が済んだ後、その水門工事とともに付近の現場工事を持たされ、工場主任心得という名をもらった。

仕事は面白くてたまらず、熱中したものである。直営工事であるので、人を使うこと、機械を扱うこと、工事費をはじき出すこと、工事期間を見積ること、工事の段取りを決めることなどに経験を重ね、創意工夫をこらしていた。その後いろいろな工事、あとで江戸川改修の関宿の分流工事など担当6か年の内務省勤務は今でも貴重な経験と思っている。

3年半ほどして内務技師に任官した。前の人たちは1年半ぐらいで任官したが、私たちは席がなく、時間がかかったが、仕事は別に変わったわけでもない。

大正3、4年ころは物価も安定して、60~70円の月給では、ゆったりした生活ができ、河川の旦那と言われたものであったが、第一次世界戦争が始まりその余波で、7、8年ころから物価が上がりはじめ、暮しのことなどお互いに話したことの無い仲間うちで、大根1本がいくらするなどと話題になり、暮しの話が始まった。

このころの勤務は月2日の休みがあり、それも返上して、働かない日はないくらいで、朝は早朝、夕は日が暮れてから帰る日常で、新婚の妻が何度も何度も食事を暖めなおして待っていたが、仕事は楽しく、同僚皆が同じ状態であった。

2. 転職、そして倒産

大正8年末、内務次官をやっている私の郷里の先輩小橋一太氏から、君の役所の上の人に君のことを聞いて見たら、よくやってる、いずれ洋行の番がくるだろうとも言っているが、君は今の仕事が面白いかという。実はアメリカ合衆国の資本と技術が参加する民間の大電力会社の計画があり、博士級の技術屋を推薦してくれと頼まれている。君にはまだその資格はないが、計画者は君より若いくらいの人であり、日本も若い人でやっていかねばならぬと思っているが、どうか考えぬかという。私の水力電気への関心は学生時代からであり、また、役所というところは、思うように仕事が進まない、法科万能で技師は職人扱いの別世界人であるような風潮がないでもない。これは、物おじしないで飛び込んでやれと決心してしまった。最初の仕事は長野県が中心で天竜川や梓川などで水利権は出願してあり、今の佐久間ダムなどはその目玉であった。合衆国から協力の主なる人や技術陣もやってきた。喜び勇んで正式に参加したのは大正9年の1月、私を主任にしてくれ、月給は内務省の3倍300円くれた。事業を代表してゆくからにはケチなまねはするなと社長に言われた。喜び勇んで現場を飛び回り、計画をめぐらし、新しい世界に希望を持って進んでいると、半年もしない5月になって経済界の大不況が見舞ってきた。企業主茂木総兵衛氏は大規模な貿易をやっており、また一方、銀行も横浜でやっていたので、まず銀行のほうに動揺が起り、投げ出さざるを得なくなって、私も大海にほおり出されることになった。このとき元の上司中原さんから戻ってこいと言われ、また、他の役所の勤め口も小橋さんが世話してくれたが、私はすでに違った世界に飛び込み、あと戻りする気にはなれないので、独立して仕事をするという向こう見ずの出発をしてしまった。これは、私が使っている事務所に居座って、私と一緒に働いていた人たちの同意も得て、ここで今でいうコンサルタントの仕事をしようというのである。幸い丸の内にあった事務所は茂木氏の好意と、私の先輩である三菱地所部長の扱いでさしあたり使うことは許されたが、資本などは皆無、解雇手当2か月分と、1、2か月残務整理する間の給料しかない。それでも強引にはじめたが、何をやるか、だれから仕事をもらうか皆目予定はたたぬ。しかし、先輩・友人・知人はありがたいもので、測量を

しろとか、写図をしろとかにはじまり、そのころの水力熱がまだあって水利の出願書作成や小水力の実施設計、地方でやる排水門や河川関係、さては漁港の築港や、埋立新地造成、なんでも手あたり次第にやっていった。当時、年2万円では足りず3万円ではいくらか残って、先輩たちを一流の料亭に招いて気焔をあげる始末、不足を補うために夜学校の先生を3か所やって、からだを悪くしてしまった。

3. 朝鮮へ

このころ私の知人がきて朝鮮には水利事業がウンとある。手はじめにその自分の事業に手を貸し、またほかの仕事の世話をしよう、朝鮮に事務所を設けろというので京城にも事務所をおいた。これが私の朝鮮事業への転換のはじまりである。

私の丸の内の事務所は便利であり、スペースも相当にあったので、私の仲間の技術屋がクラブ扱いをして毎日勤めが終わった夕方から集まり、談論風発、とうとう工人クラブという結社をつくり、政治を語り、社会運動を論じ、学園打破を強調し、先輩の所に押しかけて議論をするなど、にぎやかなことになった。当時、偉い技師連が結成していた工政会なんのそのと大いにやった。目立った人では、技師出身であとで企画院次長にまでなった宮本武之輔君や、ほかに土木屋だけではなく、機械や化学や法科の人たちも参加してくれた。

4. 森田さん、野口さんのこと

ここで私が朝鮮の大水力開発に発展していく次第を述べ、また、明治・大正・昭和初期を通ずる技術出身の事業家の話を述べなくてはならない。

朝鮮で水力開発ができないものかと当時できたばかりの新しい5万分の1図の全道分を集め、また、総督府の土木課に出入りして雨量や河川流況を知り、研究をはじめると、半島は東に脊椎山脈があり、大きな川は西流しているが勾配はのろい、また濁水がひどい当時は大ダムや大貯水をつくることはまだ考えられないときで、西方への大水力は考えられない。しかし、東方への流域変更はありうるかも知れない、ゆっくり調べようと思っているとき、同郷の先輩森田一雄さん（明治29年東大電気、多くの水力発電を手がけ、電気屋というよりも土木屋といってもよい人で、当時、早川電力の専務で茂木の水力企画にも力を貸し、また、私の工務所にも仕事をよくくれた人であった）がきて、早川が合併になって、自分の仕事はなくなった、朝鮮で何か仕事はないかと私を訪ねてこられたので、私は考えておる流域変更その他の新し

い分野があるかも知れぬ、資料を差し上げますから研究されてはどうかということがはじまりで、共同研究の結果、北鮮に大貯水式で流域変更の大電力があることがわかり、これの実現には電気化学をやるほかないとし、森田さんの同級生で、私も知っており、また仕事のお得意先である日本窒素の社長野口遵さんに話を持ち込み、その積極的な合意で事業がはじまった。

野口さんは、後年財閥とまで言われた大事業家であるが、今日ではもうあまり知る人もあるまい。学校出てから小さな送電工事を担当し、そのころとしては電気は出ても使いようがないとき、化学工業用に大量を使うことを考え、はじめてカーバイトの製造をやった人である。外国との交渉もあり、技術導入もして、はじめて日本で合成アンモニアをつくった人でもある。太っ腹で見通しの早い剛胆な人であった。私との出会いは、私の先輩橋一太さんが清浦内閣の書記官長として選挙をやることになり私が手伝いをすることになり、その紹介で（紹介状には私のことだけしかなかった）選挙費用をもらいにいったことにはじまる。すごい目付きで私を見つめ、なんと思ったか私のいうとおりの金額を初対面の私に出してくれた。それを縁にその後私は仕事ももらい、森田さんと話し合って、朝鮮の仕事を持ち込んだものである。

一諾、すぐに仕事ははじまり、私はコンサルタントとして調査隊をつくり、測量設計をはじめたが、仕事があまりの面白さに私を使用人として使ってくれと申し込むと、すぐに承諾、事務所を閉じて大正15年1月家族とともに朝鮮に引き移った。朝鮮水電という会社が創立され、野口さんは社長、森田さんは専務、私は当時学校卒業後11年あまりであったが、森田さんが工務部長を兼ね、私は工務部長代理として全工事の計画施工を担当したのである。本格的な発電水力工事も、準備のための鉄道も、発電の電気も送電も皆森田さんに教わりながら進めた。はじめは年収1万円程であったと思う。今の時価に換算すると、それでも2000~3000万円にあたるで



(昭和16年、左から朝鮮総督南大將、中央が筆者)
発電開始を迎えた水豊ダム

あろう。収入のことをいったので、その後 20 年間の朝鮮生活で地位もだんだん上がって収入もふえたことをここであげよう。何年かたって年収 1 万 8000 円、2 万 4000 円、3 万円と上がり、あるとき久保田君は金が要る人だからとて野口さんじきじきに 1 年で二段飛びして 4 万 2000 円にしてもらったことがある。そのころは常務に昇進し、4 万 8000 円、5 万 4000 円と、毎年上がっていった。野口さんの亡くなった末期、昭和 17 年ころには私は朝鮮電業、鴨緑江水電社社長を兼ね、年収 17 万 5000 円で朝鮮一の月給取りであった。もちろん税は取られるが朝鮮は税率が安く、税務署の申告ではほめられていた。現在でいえば 3~4 億円にあたるであろう。身銭で友人や先輩と飲んだり、もろもろの交際費は使ったが、終戦時には、土地や家や株や預金で 100 万円を超えていただろうか。終戦とともに皆消えてしまった。

5. 男が仕事をするとき

野口さんについてもう少し書きたい。明治・大正・昭和にかけて技術者出身で大事業家になった見本として記してみたい。野口さんは独立独歩で事業を起し、私が知ったころは日本窒素という会社で九州熊本で 2 つの工場をやっておられた。電気化学の工場で、水力発電の自家用もだいぶ持っておられ、その後、宮崎県に進出したが、私らの朝鮮の話を持ち込んだ時点では、日本内地の水力開発は地方的にウルサイまた皆小規模だと嘆いておられたときであった。欧州大戦後のインフレで生産した肥料が 2 倍も 3 倍にもなって売れ、会社は増資を重ねて新しい事業をはじめめる力もあり希望を持っておられた。当時 50 才をわずか越したばかりであったがすでに産をなし、元気一杯であった。仕事に着手するには必ず現地を自分の目で見て確かめてからやるので、私も常に山奥に同行してご当人の経歴や考えを聞いており、後年の私をつくる素地を教えてもらった。赴戦江の 1, 2, 3 の発電所出力 18 万 kW が完成したとき、仕事が終わったとしてお暇をいただくことを申し出ると、君はいたまえ、水力がなくなったら何かおれが君に向く仕事をこしらえてやる、さしあたり石炭山でも担当するかとのことであったが、働くのなら私自身も仕事をつくってと考へ、次々と水力発電の計画をたて提案した。そのうちに、昭和 7, 8 年の不景気で銀行は金を貸さぬ。工場は電気が足らぬので設備が余っている。私は、1 万 4000 kW の赴戦江第 4 発電所を 9 か月で完成させ、金は後払いで、請負業者や電力機器メーカーに注文すればよい。安い電気を増産した製品で 1 年半で返せるといふ案をたて、実行に移したことがある。これに力を得て、32 万 kW の長津江発電を提案すると、銀行は融資してくれない。そのと

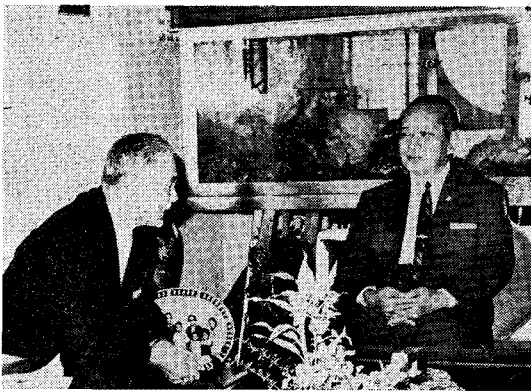
き野口さんがいうには、おれは持株の値段で変わるが資産にして 3000~4000 万円ある。この金は、おれが独裁で仕事をするので将来何か会社に迷惑がかかり、株主や従業員が困るときの予備金と思っているが、やむを得ない。おれの金で 2000 万円の会社をつくって全額負担しよう。これだけの基礎ができれば、あとは世間が見捨てまい、成功しなかったらおれは南米に逃げ出す、君もついてこないかと、非常な決心のもとで、長津江水電会社をはじめられた。その後、事業はうまくいくし、金融は楽になるし、虚川江の 34 万 kW とか、ついには鴨緑江まで進出し 200 万 kW のうち、70 万 kW の水豊発電所をはじめることになり、全体では 400 万 kW を発電、または工事にかかったのである。朝鮮ばかりでなく北支、南支、海南島、スマトラ、ジャワと広がっていった。

昭和 16 年、野口さんは病に倒れ、私に鴨緑江水電の社長を継げと言われ、また、私を病床に呼んで、かねて君に話してあるとおり、おれは金はいらぬ、おれの用意した金は今日会社に何かきずがついても、おれの持金くらの負担は自社でできる。金を国のため、社会のために有効に使いたい、何か考えてくれとのことで、持金全部を公共用に寄付してしまわれた。実に立派な行動であった。

6. 敗戦、そして再び世界への飛翔

私はこの 20 年間の朝鮮および南方地域での仕事を通じて関係の方々や、ことにトップの人に愛された。私はあえて言う。私の誠実心と、説得力とが土台であったと思う。朝鮮では歴代の総督、宇垣さん、南さん、小磯さん、満州では軍司令官や参謀長、特に板垣さんや東条さん——東条さんは後次官、大臣、総理になられるまで親しくしていただいた。潔癖で頭のきれいな人であったが、時流に流されて、あの最後は痛ましい。また、最後の 5 年間は私が自分で事業の金融をやることになったので、銀行関係の主脳や実務者とお話し合いすることになり、名も知れぬ若造が 1 億円持っていったと銀行当局に噂話が出たほどであった。

戦後引揚げて来て、まずやらねばならぬことは、私が連れていた 3000 人の始末であり、また、おこがましいが、日本再興の道であった。私のスタッフたちは私と一身同体でことにあたり、コンサルタント会社をつくり、小さな旗の下に「おれはここにいるぞ」と引揚者の世話をし、また、日本列島戦後の復興の気がまえて手弁当で歩き回った。幸いに認められて仕事は毎年ふえており、ことに 1953 年から海外に出かけ、今では海外のコンサルタントの仕事が主となり、いささか世界的にも名が知られるようになった。



スハルト大統領と会談する筆者（左）

昭和 22 年会社をつくったときは 19 万円の払込みにも窮したほどで、また仕事はなく、従業員全員、社長から備員に至るまで一率に毎月 500 円の月給でしのいだものであった。今は社長も役員も世間一般的なみの給料を払い、従業員も戦前からのもののほか毎年新卒業生が入っており、入社には試験があるほどの人気になってきた。

国外では、今インドネシア、マレーシア、ネパール、タイなどの東南アジア、シリア、ヨルダン、その他の中近東、ギニア、ナイゼリヤ、ガボンなどの西アフリカ、ことにパプアニューギニアでは 180 万 kW の大水力の開発に手をつけている。中南米にも何度も手をつけており、海外だけでも 150 人以上の社員が働いている。

海外でも、私および私の社の者たちは関係者に好かれている。これは最も大事なことで、これには誠意が物をいうと思う。また、納得のいく説得が必要である。私自身としては各国のトップに愛された。ベトナム大統領のゴ・ディンデムさん、インドネシアのスカルノさん、アフリカ・ガーナのエンクルマさんなど、皆えらい人たちであったが、いずれも私を顧問的に扱ってくれた。政治というものは、これらの人たちに不幸な終止符を打ってしまった。

あるいは逸話になるかも知れぬエンクルマさんと私との一席の話。それは彼は私の年令を聞き、あまりの老令であるのに驚き、何を食ってそんなに若いのかと聞くので、私は「仕事を食って若い」と答えると、列席の皆と一っしょに感動の声をあげてくれたので、私はすかさず「もっと食物を下さい」といって数多くのプロジェクトをいただいたことがある。

7. これから土木技術者になられる方々へ

最後に土木屋と家族生活について一言したい。私は現場づとめをやっているとき妻をもらった。現場の住居は不自由であったが金は残った。家内はそれを貯金し、家

計をきちんとして、あるとき婦人雑誌に勤め人の家計という題で投書したら一等賞をもらったことがある。実践であるので真実味があったのであろう。その後朝鮮の現場で住いを持った。会社の主脳である私が現場に住んでいたのである。家内は今でも現場生活が楽しかったと言っている。

若い土木屋さん、ことにまだ学生である人たちに一言する。あなた方はなんで土木のコースを取るようになったか。土木は自然と戦うもので、田舎の不便な所をその仕事場とするのは当然である。文化生活を考えるようでは、すでにあなた方の道の選び方が間違っていたのだ。しかし、そんな生活をしなくちゃならない職席を持つ人にも、よい奥さんがくる。よい家庭ができる。気を取り直して山奥の現場に向かいなさい。これは、戦前求められて私が東大の学生にお話した一節である。

② 諸要因からみた土木技術者の社会的位置づけ

富岡 征一郎*

わが国の土木技術者の社会的位置づけが現在どのようになっているのかをいくつかの要因別に数値をとらえながら述べてみたい。

まず最初に、世間一般の人が建設業者に対してどのような企業イメージを抱いているかについて、毎日新聞社が行った第 16 回全国企業認識度調査の結果を参考にし、概観してみよう。表-1 は、代表的な建設業 3 社を選び回答結果をまとめたものである。本表から読み取れるように、企業の知名度は企業人と学生との間ではかなりの差がみられ、したがって、各調査項目別の結果にもその差が現われてきている。また、ここにあげた 3 社間にも回答結果の差が相当あるため、建設業に対するイメージを他産業のそれと比較して総括的に述べることは大変難しいが、あえて比較してみると、一般に建設業は、① 保守性が目立つ、② 広告が少ない、③ 広報活動がじょうずでない、④ 公害防止に努力していない、⑤ 技術開発に熱心、などのイメージがあるようである。公害防止については企業人と学生の抱くイメージが、きわめてかけ離れていることは興味深い。また、企業の社会的責任

* 正会員 鹿島建設(株)重役室土木企画部